慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「Cogito, ergo sum」に就いて：精神の確立と其の近代性
Sub Title	"Cogito, ergo sum" : Establishment of Soul and its Modernity
Author	箕輪, 秀二(Minowa, Shuji)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1954
Jtitle	哲學 No.30 (1954. 3) ,p.71- 102
JaLC DOI	
Abstract	Since Decartes made public his proposition of "Cogito, ergo sum," numerous arguments and objections have been made with regard to its historical back-ground and its logical contradictions. Especially in the modern ages, various studies on the proposition have been promoted including bibliographic study by E. Gilson; logical researches by O. Amelin and J. Lapport; studies from the religious standpoint by J. Maritain; researches from the angle of the so-called existentialism such as by K. Jaspers and J. P. Satre; in addition to the materialistic studies which purport, as having been tried by H. Lefevre in his "History of Thoughts," to solve Decartes' contradictions. In this short story, we would like to infer the proposition's significance by solving the contradictions in keeping with Decartes' methods -- the order of quest -- and the order of description. In Chapter I, an answer is give to the question what cannot be meant by "cogito" in general sense. Through this negative quest shown above, we intend to make positive solution of the proposition in Chapter II, because the negative solution would make it easier to solve positively the problem. To show what we can learn through the negative and positive solution in the above two chapters, it would be the best to quote the terms of Decartes himself as follows: "....For no one before me, so far as I know, asserted that it (i. e. the rational soul) consists in cogitation alone, or in the faculty of cogitation, or the internal principle." Chapter III treats of the significance of the establishment of a soul to distinguish the true from the false as the power of quest which is solved in chapters I and II. By regarding the establishment of the soul as a desperate challenge to Montaigne's scepticism, as E. Gilson did, we would like to appreciate highly the modernity declared by the proposition, whatsoever might be the contradictions of the proposition or the contradictions which would be interpreted as the reflection of the social dilemma in Decartes' minds. In addition, we believe that it would be one of the objects of our future researches what significance would be further shown before us by the "establishment of the soul" as well as "the modernity."
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000030-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「Cogito, ergo sum」に就いて

——精神の確立と其の近代性——

箕輪秀二

序

「我思惟す、故に我在り」(Cogito, ergo sum) はデカルト哲学に於いて必ず一度は通らねばならない関門である。この命題が提出された当時から既に、その歴史的先駆に就いて、或いはその命題自身に内在する諸矛盾に就いて幾多の論議と反論がなされている。

近代に至つては、ジルソン、シルヴァン、コーエン等の詳細な文献学的研究、アムラン、ラポルトの論理的研究、グイエ、シュヴァリエ、マリタン等の宗教的立場を重んずる研究、ヤスパース、(一) サルトル、(二) アラン等(三)の所謂実存論的研究、更にこれらの諸研究を基礎とし、従来の諸研究のデカルトの思想の、思想そのものの内部に於いて、閉鎖的に問題とする態度を越えて、唯物史観の立場から、当時の、種々の社会的経済的政治的要素の混在する、社会構造の矛盾を指摘し、それとの関連に於いて、この命題を含めてのデカルトの思想の論理的諸矛盾を解明せんとする、いわば、外から解明せんとする最近の研究等(四)、幾多の研究が試みられている。我々はかゝる労作の、みのり豊かな成果をそれぞれの立場で認め得るのであるが、「単純性は真理の規準とされているが、(そしてそれは多くのフランス人には自然

のようになつている）不都合がないではない。明晰性と単純性と混同し、単純なるものを、見なれているものと混同する事は何と容易になされることであろう。それで、明晰性の好みが、明晰性そのものに背を向けることとなる。明晰性や単純性の方が選ばれるから。現実や複雑なものはどうしようもないほど不明瞭に見える。それらのものに頭をそむける。獲得することよりも、獲得されたもの――その方が明瞭になつているから――の方が骨の折れる探究よりも、見かけの単純性の方が、また具体的なものよりも欺瞞的に明晰な抽象の方が選ばれる。そしてあまりに早く、その抽象に身を委ねる」(五)ことなく、デカルトのこの命題に於いて、その内的矛盾のみではなく、そこに何を彼は示めさんとするのかを考察したいのである。

我々の当面の問題は次の様になる。

「我思惟す、故に我在り」の命題に於ける、「我思惟す」Cogito は何を意味するのか。それは一体何を意味し得るのか。この Cogito は、神の存在証明や、「第六省察」に於いて考察され、解明される問題を前にして、如何なる意味を持ち得るのか。

我々はこの考察に於いて一つの前提を、デカルト自身云明するところの前提、即ち秩序を認めねばならない。然もそれは、デカルト自身と、――それを一人称の形で物語らんとするデカルトの関係に於いても認めねばならない。我々は、かゝる前提に立ち、先づデカルトの命題に於ける、この Cogito が一般に何を意味し得ないかを問題とする。この否定的な考察によつて又、我々は容易にその積極的意味を解明することが出来るであろうから。

さてこの否定的考察によつて獲られた Cogito の積極的な解明によつて更に「思惟するもの」(res cogitans) の意味を解明しなくてはならない。かゝる考察によつて獲た Cogito と「思惟するもの」(res cogitans) は、一体何を示

すのか、が次の問題となる。

この問題の解明は、ルフェブルが「この歴史的事実は思想の社会史によつてしか説明されない」と、彼の「デカルト論」の中で云うとき又、ヂルソンが、「モンテーニュ懐疑主義からの、哲学に於ける構成的思惟の近代的時点への移行」[六]と云い、「デカルトの哲学はモンテーニュの懐疑主義から逃れんとする必死のあがき(a desperate struggle to emerge from Montaigne's scepticism)」[七]と云うとき我々に与えられる様に思われる。以下章を追つて考察したいと思う。

〔註〕

(一) ヤスパースはデカルト自身に於ける、実存的思惟が、その体系の途中に於いて対象論的思惟にすり替えられたものと解する。尚ヤスパース哲学はデカルトの哲学とその類似せる点を多く有つも、ヤスパースの「デカルト論」は共感よりもむしろ反感を示している。
Descartes und die Philosophie 1937. 2 Aufl. 1948. Descartes et la philosophie (Revue philosophique) 1939. 参照。
尚デカルトの実存的思惟が、この命題に於いて本質主義偏向を受けたる点を指適したるものに本誌二十七輯掲載、沢田允茂氏の「デカルトと実存」がある。

(二) サルトルはデカルトの矛盾を、彼自身考える実存的思考が、時代判約の下に、覆われた不充分な状態の表現と解する。

(三) デカルトに於ける諸矛盾は我々自身の理解の不充分の裡にあるとアランは解する。そしてデカルトの体系自身に、統一的な整合体系を前提し我々にそれをテキストに従つて正しく理解すべきを要求する。

(四) Henri Lefevre: Descartes. Paris 1947. 尚邦訳、服部・青木訳「デカルト」参照。

(五) Ibid; 邦訳二六〇頁。

(六) E. Gilson: The unity of philosophical experience, New York 1950 p 126.

(七) Ibid; p 127.

一

「学ぼうと努力しながらも、次第に自分の無智を発見したと云う事を別しては、何等の利益も受けなかつたように思われるほど、はなはだ多くの疑惑と失策」に包まれつゝ、ラ、フレーシュの学院を出たデカルトは、然も尙確実不可疑的な学を求めんと努力する。

「いつか私がもろもろの学問に於いて或る確固不易なるものを確立しようと欲するならば、一生に一度は断じてすべてを根柢から覆えし、そして最初の土台から新たに始めなくてはならない」と決心し「私が嘗つて信じたところの一切が拠つて居た原理そのものに直ちに肉薄せん」として方法的懐疑を遂行する。確実性に対する探究を試みんとする。デカルトは又この方法的懐疑によつてあらゆる主張、意見を無に帰してしまつた。如何なる人間の存在も、その意見と彼等の経験とともに可疑の領域に移し入れてしまう。これらの事物は、学に於ける真理の探究の基礎が確立された後、又再検討されねばならない。それによつて知識が正しくあると云はれるところの能力は、あらゆる実在的な関係は疑わしい（その能力自身は別として）と云明する。ルネ・デカルトや其の他の人々は、何か若し存在するならば、思惟する能力以外は、その存在に関して、又その彼等が何であるかと云う事に関しても不確実であると云わねばならない。現存する学は未だこの学に於ける真理を探究する能力に対しては原理として確立されて居らなかつた。存在の秩序は部分的にさえもこの能力と一致して居る事を示すことは不可能な事であろう。

ただ学に於ける確実不可疑的なものを探し求めんとする能力のみが存在する。(一) この事は又、他の如何なるものが存在しようとも、この能力が存在しないならば、如何なる探究も、存在しないと云う事である。この能力は、「思惟する

もの」、「精神」、「知性」、或いは「理性」と呼ばれるであろう。これらものは正しくは、その真偽の判定に対する最高の作業の見地からして、「理性」と呼ばれるであろう。

方法的懐疑は、確実性の探究の終局が理性それ自身の裡に存在することを明らかにした。(二) 我々はこの理性、精神の確立をデカルトの云葉の裡に探し求めよう。

方法懐疑を遂行しつつ更に先に進まんとするデカルトは、アルキメデスの一点を求めんとする。

「アルキメデスは、全地球をその場を移動させるために、一つの確固不動の点のほか何も認めなかつた。もし私が極めて僅かなものであれ何か確実で揺がし得ないものを見出すならば、また大きなものを希望することが出来るのである。そこで私は、私の見るすべては、偽であると仮定する。また、私はひとを欺く記憶が表現するものはいかなるものにせよ嘗て存在しなかつたと信ずることにする。私はまつたく何等の感官も有しないとする。物体、形体、延長、運動及び場所は幻想であるとする。しからば真であるのは何であろうか。多分この一つのこと、すなわち、確実なるものは一つもないと云うことであろう。

しかしながらどこから私は、いましがた数え上げたすべてのものとは別で、少しの疑うべき余地のない或るものが存しないことを、知つて居るのであろうか。何か神と云うもの、あるいはそれをどのような名前で呼ぶにせよ、何か、まさにこのような思想を私に注ぎ込むものが存するのではあるまいか。しかし何故に私はこのような事を考えるのか、多分私自身がかの思想の作者であり得るのだ。

それ故に少くとも私は或るものではあるまいか。しかしながら既に私は、私は何等の感官、または何等かの身体を有することを否定したのであつた。とは云い、私は立ち止まされる。と云うのは、このことから何が帰結するの

であるか。いつたい私は身体や感官に、これなしには存し得ないほど、結びつけられているのであらうか。しかしながら私は、世界の中にまつたく何物も、何等の天も、何らの地も、又何等の精神も、何等の身体も、存しないと私は説得したのであつた。従つてまた私は存しないと説得したのではなからうか。否、実に私が或ることについて私を説得したのであるならば、確かに私は存したのである。しかしながら、何か知らぬが或る、計画的に私をつねに欺くのならば、この上なく有力な、この上なく老獪な欺瞞者が存している。

しからば彼が私を欺くならば、疑いもなく私はまた存するのである。そしてできる限り、彼は私を欺くがよい。しかし私が或るものであると考える間は、彼は決して私が何ものでもないようにすることは出来ない。かやうにして、一切の事を充分に考量した結果、最後にこの命題、私はある、私は存在する（ego sum, ego exist）と云う命題は、私がこれを云表する度毎に、あるいは、これを精神によつて把握するたび毎に、必然的に真であるとして立てられねばならない。(三)」

この云葉をもつて、探究するデカルトはアルキメデスの確固不抜の一点を獲得したる事を我々に知らせる。確実性に対する探究は有終の成果を獲た。懐疑（Dubito）は Cogito によつて置き換えられる。

より正確に云うならば Dubito は Cogito の中に吸収される。Cogito は理性の独立した遂行に対する、そしてかかる能力が存在する限り、第一原理として提出される。

ところでこの Cogito が知られるとき何が知られるのか。これも又解明さるべき問題である。真理を探究せんとするデカルトは、勿論、この問題を実在的な関連を有するものと解する。如何なる陰影も邪まなる神の雲によつて、この実在的な関連に投げかける事は出来ない。かのアルキメデスの確固不動の一点は、この神の支配の外にあると解

する。

では実際、このCogitoが知られたるとき、一体何が知られるのか。デカルトは、我々に何をCogitoによつて知らそうと云うのか。

探究せんとするデカルトと、一人称によつて表われるデカルトとはこの有名な主張を遂行するために努力する。然し同じ意味ではなく、異なつた意味に於いてである。

この問題の解明は、就中、この云明が、我々に伝達することを含んでいないし又、目的ともしないところのものを決定することによつて企てられるのではないか。

然しながら、この裏返しの、否定的な方法は、二つの異なつた方法で、我々は解明せねばならない。それは先づ第一に、デカルトは「私」によつて表わされたデカルトの言葉で、このCogitoに如何なる解釈を拒否したかを決定せねばならない。

更に、如何なる内容が、このCogitoにつけ加えるべきでないかを決定せねばならない。デカルトの探究の企図の見地に従つて、即ち確実性への探究とその方法との見地に従つて決定せねばならない。例えデカルトは時として、彼自身、「私」として物語る裡に誤導され、理性の声としてのデカルトと、「私」によつて表わされる彼自身の声との混乱する人間の誤謬に落ちるとしても、その方法の見地からして、我々は如何なる内容が、Cogitoに与えるべきでないかを決定せねばならない。我々はデカルトのCogitoの意図するものを求める場合、かゝる観点からする事を充分に留意せねばならない。

そして若し我々が遂行するこの否定的な探究方法が、その終局に於いて何らかの照明を表わしてくれるならば、こ

の Cogito の真の意味、即ちその積極的な内容の発見は容易となるのではなかろうか。差し当り我々は、この解明を二つ面に於いて探し求めねばならない。一方に於いては、デカルトの自身の思索の秩序に、他方一人称に於いて敍述される秩序や、デカルトが我々に伝達せんとする秩序に関係づけて、考察されねばならない。即ち既に探究の結果、確実なる一点を求めたるデカルトと、我々に伝達――自己自身の獲得したる真理を我々にモノローグの形に於いて――せんとするデカルトとの二面に於いて考察されねばならない。

では一体、この Cogito 意味しないものは何か。如何なる範囲迄、デカルトの言葉は(方法敍説や省察録中の)方法的懐疑より以上のものを主張せんとするのか、我々は「方法敍説」や、「省察録」の著者が、それらを書き始める以前に既にその終末を予想して居つた事を観察せねばならない。思想家は常にそれを書き始める前に表現すべき思想を持つている。敍述の時間的順序は必ずしも発見の順序に平行することを要しない。之れに関してはデカルトはこれらの著作の初期に語られる言葉をもつて、終局に於いて獲られた言葉として理解することを拒否している。

勿論デカルトは物質の概念を獲得して居つた。そしてその概念からして、「省察録」を書き出さんとする以前に、霊魂の概念をもつて居つた。それ故に彼の全教説の見地からして、この霊魂に如何なる性質を附与すべきかを、考察するとき彼が経験する当惑は、これらの著作が書かれる以前に、部分的に経験せねばならなかつた問題であつた。

さてこれらの考察、我々がデカルトに従いつゝ解明せねばならないこれらの考察のすべては次の様な問題になるであろう。

即ち、Cogito は何を意味するのか。これは一体何を意味し得るのか。この Cogito は神の存在証明や、第六省察に於いて遂行されるべき問題の考察以前に如何なる意味を持つのか。

その Cogito によつて――かゝる制限を持つ――何を一体我々に意味せんとするのか。

この意味の嚴密なる確定はその敍述の順序からして邪まなる神の非存在が証明される迄は、――即ち、理性と有限存在との調和適合が具現する迄は不可能な事であらう。デカルトが敍述せんとする、「省察録」や「方法敍説」に於ける物語りもこの制限を当然受けねばならないのである。でなければ、それは不当と云われるべきであらう。それ故に又デカルトの思想も、敍述の秩序もかゝる制限からは逃れ得ないであろう。我々はそこで、注意深く、「我在り」(ego sum) に続くデカルトの言葉を取出して見よう。然し私は、「存在することが確実であるところの私が何であるか」を知らないと云う。デカルトにとつてさへ明瞭でないことは、我々にとつても又、すべての理性にとつても知られないと云うことである。ところで我々の扱う問題は確実性への探究であり、それは全く認識論的な問題であり、又形而上学的な問題なのである。存在するところのものに依存するあらゆる主張は疑わしいのである。存在する事実的なものは、それ自身の中に何らの真理の規準も保証をも有して居ない。勿論之れら存在する事実的なものは理解し得るものではある。然しデカルト自身に於いても、又其の他デカルト自身以外の如何なるものに於いて如何なる不可疑的な主張を獲ることが出来ようか。人間は意識する存在であり、この存在は一定の感情、状態、確信から逃れることは不可能であり又これらの存在が若し存在するならば、勿論この感情、状態、確信から逃れ得ない存在ではあろうが然し実際に存在するものは又所謂、意識の直接性さえも確実性の根拠とはなり得ないのである。又その原理にも、真偽に対する判断の権威者ともなり得ないのである。たゞ Cogito のみは方法的懐疑の徹底的遂行の裡に現はれた、確実性への探究を遂行せんとして見出された最後のものである。懐疑の終局を示すこの「我思惟す、故に我在り」(Cogito, ergo sum) は「私が存在する」ことを確立した。然しながら、この「私が存在する」と云うこの云葉は当然、「私は何で

あるか」に依存するのである。従つてこの「私」はその内容が、「何であるか」と云ふことを決定することによつてこの「私」に与えられる迄はたゞ単なる空虚な記号の意味しか持たないのである。邪まなる神の可能的存在はこの「私」を人間と、そして、肉体として、或いは霊魂として、或いは意識としての人間存在と同一化すること不可能とするのである。では一体何がそこに残るのか。「この「私」は考えるものである。」とデカルトは云う。然しながらこの「思惟するもの」、即ち「私」に附与さるべき内容は如何なるものであろうか。

恐らくこの問題は、非常に重要なテキストを考察することによつて、然もそれが物語りの秩序に原因するところの保証されざる意味を含んで居るが故に、尚一層重要であるところのテキストを考察することによつて導かれるであろう。

「思惟するとは何であるか、私はこゝに発見する。思惟のみは、私から切り離し得ないのである。私はある。私は存在する。これは確かだ。しかし如何なる場合にか。もちろん、私が思惟する間である。なぜと云うに、もし私が一切の思惟をやめるならば、私は、直ちに有ることを止めると云うことが恐らく又生ずるであろうから。いま私は必然的に真であるものの外は何も許容しない。そこで私はまさしく、ただ思惟するもの、云い換えれば、精神、霊魂、すなはち悟性、理性である。これらは以前その意味が知られて居らなかつた言葉である。しかし私は真に存在するものである。

だが如何なるものであるか。私は云つた。思惟するものと。(四)」

「然し私は何であるか、思惟するものである。思惟するものとは何であるか。云う迄もなく、疑い、理解し、肯定し、否定し、欲し欲せぬ、なほ又想像し、感覚するものである。(五)」

「方法叙説」の裡で Cogito は「私は一つの実体であり、その実体の本質或いは本性は考えると云う事だけであり、

そしてかゝる実体の存在するためには、何等の場所も必要とせず、何等の物質的なものにも依存せぬものである」(六)ことを保証することが云われているが、然し我々はこの引用したる数行の文章の中に一連の保証された主張と保証されざる主張が存在することを見逃し得ないのである。勿論この不一致の原因は一部はデカルトの敍述の要求に、一部は著者自身の反省の制限から、或いは恐らくデカルト自身もかのホーマの如き、ノッドであつた事に由ると見られるであろう。が簡単に之れを云うならば――方法の見地から我々が見るとき――デカルト自身の言葉を借りて、「第六省察」に於いてで迄は確立され得ないものを不法にも、「第二省察」の中に押し入れたと云うべきであらう。それによつて我々が正しく知ると云われる能力の機能的分離は如何にして、この段階に於いて人間に、自己自身に、心理学的主体に、即ちデカルトに関係させられるであろうか。思惟するところの一つのもの、――ある一定の思惟するもの――は疑い、理解し、否定し、思惟するところのものとして定義づけられる。簡単に云うならば、思惟するところのものは理性である。かゝる点に於いては、想像したり、感覚したり、肯定したり、意志したりするところのものとは同一化することは不可能なのである。この理性は到底物理学の主問題となり得ないものである。仮令如何なる物理的なものが存在しようとも。デカルトは、暗々の中に、事実的にではなく、言葉の上に於いて、後の「第六省察」の見越しを「第二省察」の中に導入した事を知るに至つた。批判者はデカルトにこの「第二省察」に於いて確言せんとするところのものは、「第六省察」に於いて確立せんとしたところのものでないことを知らせたのである。

デカルトは「第二反論」の著者によつて指適された問題に言及しつゝ「第二省察」から彼は引用する。

「然しながら、私にとつて知られていないが故に存在しないと私が主張するところのものは、実際には、私が知つている自己自身とは異なつていないかも知れない、恐らくは。然しながら、私は云うことは出来ない。この事は、私が

今論じているところの問題ではない。(七)」

即ち、デカルトとデカルトをしてそれ自身の存在の中に信じさせようとする直接体験との仮定的な一致は、理性の声としてのデカルトによつては、考えられ得なかつたのである。

「この言葉に就いては、私は読者に注意して置きたい。この省察に於いては、私は未だ精神は肉体から区別されているか否かも調べて居なかつた。たゞ私は私が確実にそして明白に知ることの出来る精神の諸特性を探究しただけなのである。そして私は、多くのかくの如き諸特性を発見したので、限定された意味で、貴方達に述べたのである。即ち思惟するものは何であるかと云う事に関しては私は未だ知らなかつたのであり未だ思惟するものが、肉体と同じであるか、或いは何かそれと異なつたものであるかどうかは発見して居ないことを告白する。然しながら、そのために私は精神に就いての知識を全く持たないと云うことは承服し得ないのである。(八)」

デカルトは、上述したる如く、思惟するものが物体的なものでないと云ふ事を主張しつゝも尚、彼の論議の基礎として仮定を用いる事を拒否するのである。

「私は全く第六省察にまでは、この事を追求すること保留して置いた。そこには、その証明が与えられるのである」

証明の秩序の問題と関連して――先きに我々はその順序を見た――精神と肉体との区別の問題に関しては、この第二省察にではなく最終的に「第六省察」に於いて始めて論ぜられらると云う事を我々は見るとき尚一層この点が肯定せられるのである。(九)

デカルトは自己の思想を述べるにあたつての必然的順序と、一人称で述べんとするモノローグの秩序との間の相異

を知らなかつたのではなかつたのである。彼自身の示すところのものによつて、「第六省察」に示めされた結論の言葉で、この第二省察をよむことは、懐疑によつて確立されたところのものを誤解することになる事を我々は上述の引用から知ることが出来るのである。ヂルソンも、この精神と肉体との区別は、一六二九年中に於けるデカルトの反省より後の事であり決してそれより先ではないことを主張している。(一〇) この点は、デカルトの解釈、特に Cogito 解釈にとつて重要な意味をもつて居るのである。霊魂と肉体との区別は、デカルトによつて、発見されるべき問題なのである。それはデカルトの生涯に於ける中途の仕事となるのであつて、決してその学の探究の出発点に立つデカルトの思いもよらない問題なのであつた。従つてこの発見が、一六二九年或いはその直後になされて居つたと仮定するならば、恐らく「方法叙説」や「省察録」は二元論に決定された条件の下に始めから書かれたであろう。勿論前述した如く、デカルトは「省察録」の著作に於いて「第六省察」に於いて解明さるべきところのものを知つて居つた。然し又論述の最初の部分に於いて、特に後の部分に属するものを主張することが論理的に不可能であることをも知つて居つた。彼は実際に一人称で語るところの適切な問題に直面するのである。デカルトと同一化さるべきこの物語りの「私」が存在する。Cogito の「私」が——この物語モノロークの意味を持つたもの中に表現された——存在する。然しデカルトにとつては、それは、邪まなる神が存在する限り、如何なる主張も保証されないところの領域に帰せられるのである。実際、叙述者としてのデカルトの秘密の予見によつてこの「私」、精神と肉体との二元論、事物の本性や、意識の関係や、その意識のと内容と事物との関係に就いての二元論の意味を持つた「第六省察」に於ける「私」が存在したのである。我々の考察したるところからして、根本的な点は次の事である。即ち、我々が方法的懐疑の終局のものとして、そして絶対者への形而上学的飛躍の準備としての Cogito を我々が形而上学の結論として、又は実在する学問

への準備として後に問題とせねばならない教説の言葉で理解するならばこの Cogito を誤解することになると云う事である。更に附け加えるならば、彼によつて彼が導かれたところの精神と肉体に関する結論に彼が、驚かされたと云うことをヂルソンが指摘して居ることは、我々の考察にとつて注目すべきことである。デカルトはこの事実を表明する機会を持つた。精神と肉体とに関する論争に関連して、「第六反論」の著者が、反論よりも疑惑を表明して居る様に思はれることを見ることによつて、この勇気を振るい起す考えを抱くに至つたのである。

「先づ、この省察の中に解明された根拠が、人間の精神は実際に肉体から区別され、そしてそれよりもよりよく認識される事を私に知らせた時、この事を認めさせるのは、この議論の中には、論理学の法則に従つての最高の明証性に密着して、かけ離れて居るようなものは私が見出すことが出来なかつたが故である。然し私は告白するが、私はそれによつて全く承認したのではなかつた。」(一一)

前述の如くヂルソンも指摘しているのであるが、(一二) 要するに、人間の本性に関する教説を物語りの形で述べることを、デカルトの理性が、デカルトに強要したと見てよいのではないか。そして、デカルト自身も其の後、この教説を全く承認する様になつたのである。

さて我々の今迄の考察は、Cogito の意味しないものに向つてなされた。そこに何が Cogito に附与されてはならないかが解明された。

ところで、Cogito に終るところの方法的懐疑は、何を一体露わにするのか、思惟するものとは一体何を意味するのか。

〔註〕〔デカルトの著書からの引用はすべてアダン・タヌリ版を用う〕

(一) あらゆるものを懐疑の底に落ち込めてしまふ、かの邪まなる神の有力な策謀、魔術 (Diabolism) はあらゆる存在を支配し ないし、又出来ない。それによつてのみ真偽の区別が成立するところの機能、理性、探究能力はこの神の支配の中には、落ち込 まないのである。あらゆる探究は、それを何と呼ぼうと、真偽を判断すべく課せられた探究能力の欠除に於いては、不可能とな るのである。懐疑はこの能力が必然的に存在し、この能力が何であるかを露わにするのである。邪まる神は理性の命令に従つて 創造されたのである。

(二) 註一に於いて述べられてあるが、尙この点を簡単にフェーブルは「デカルト論」に於いて述べて居る。Henri Lefevre: Descartes, Paris. 1947. chap. II. IX. (b). 服部青木訳「デカルト」一〇三頁。

(三) Meditationes: (AT.)

(四) Ibid.

(五) Ibid.

(六) Discours. (AT.)

(七) Meditationes: II Reponses AT. IX. p 102.

「第二反論」に於いてメルセンヌが、如何にして肉体は思惟することが出来ないのかと云ふ反論に対して、デカルトは現在のところ (第一、第二省察に於いて) これらの疑問に就いてその理拠を与えることが出来ず、それに就いては第六省察に於いて先づ論ぜられる事を以つて答えている (AT. IX 104)

従つてこの初めの段階に於ける省察に於いての精神と肉体との区別や、それに連関した表現の使用は、事実的なものではなく、全く文字の上の、物語りの上の、リトリックな問題と見るべきではないか。

(八) Meditationes: II Reponses AT. p 107.

(九) 「思惟するもの」が何であるかを知るに就いては、彼の存在論的二元論 (第六省察に於いて論ぜられる) との関係を以つて して始めて知り得ることなのである。その秩序、順序を忘れなかつた事は次の一句に明瞭に表わされている。「秩序と云うものは、たゞ其の後に続いて生じて来るところの助けなしに知らるべきこれらの事物を差し出すことである。……私は確かに、私の

省察に於いてかゝる秩序に從わんとした。然かもその事は、精神と肉体との区別に於いて論ずることを保留することによつてである。この事は「第二省察」ではなく、最終的に「第六省察」に於いて論じたのであるが。この事は、其の他の多くの説明を要するが故に、慎重にそして意識的に避けたのである」（傍点著者）Meditiones II Reponses.

（一〇）E. Gilson: Etudes sur le rôle de la pensée medievale dans la formation du systeme cartésien Paris 1930 p. 165.
La première (conclusion) à laquelle Descares soit arrivé, en atteignant le term de sa métaphysique en raison des preuves apportées par la métaphysique elle-meme, fut précisément la distinction de l'ame et du corps.
Cette thèse capitale est donc posterjeure et non pas anterieure à la meditation de 1629……

（一一）Meditationes. VI Reponses. AT. p. 239.

（一二）E, Gilson; Etudes sur le role. p 166—167 cf.

二

思惟するものは一体何であるのか。思惟するものは、「第六省察」を前にして何を意味し得るのであるか。如何なるものと雖も、それに附加わるべきものがこの Cogito に依存し之れに依つて始めて結果されるものである限り、この思惟するものの「何であるか」を表わし得ないのである。要するに、邪まなる神の存在するか否かに依存するところのこの「私」に関する如何なる敍述も、この段階に於いては判断を差し控えねばならないのである。

Cogito の「私」に関するあらゆる内容は発見されるべき問題なのであり、この全内容の解明は、神の存在が証明され、同時に邪なる神の存在が否定されたる時、始めて、デカルトに対しての、あらゆる人々に対しての、又我々に対しての、この「私」との関係が成立し、考え得られるのである。

方法的懐疑の終局に現われたCogitoは、機能或いは探究能力の分析的な分離を表わしている。確実性に対する探究をなさんとするデカルトは、存在する事実的な事物に関係するあらゆる主張を可疑の領域に移し入れてしまつた。と同時にそれは、真理や虚偽の規準、確実性と不確実性の規準は、かゝる実在する事物の中に見出さざるべきではなく、たゞある探究能力が常に不変的に探究のあらゆる行為の裡に存在し、その行為の裡に不分離なところものの裡に存在することを見出すのである。

かゝ確実性への探究の途上に於いて考量された要請は、あらゆる探究者によつて保証された、これ以上帰納し得ない「最小限の存在」を見出したのである。之れによつてのみ探究が探究として可能となるところの最小限の存在、認識能力が存在するのを見出したのである。それによつてのみ探究となづけられ得る、認識する能力が、探究する能力が存在するのである。この能力の存在することによつてのみ、真理と虚偽の区別、判断が、一つ意味を有つて来るのである。懐疑は方法、手順であり、確実性の規準はその終局点として示される。思惟するものは存在する、そしてこの存在するものは思惟するものである。それは又真偽の判断を生むのである。それ故に我々は、若し我々が存在し、其の上、探究せんとするならば、この真理と虚偽に対する判断から逃れる事が不可能となるのである。

思惟するものは、真理と虚偽に対する最高の権威であり、最高の君主である。

探究のあらゆる主張に関しては、この思惟するものは、自己に対する判定者となるのである。これは生得的に権威的なものなのである。思惟するものは、これ以上のものでもこれ以下のものでもなければ、又部分的な言葉や或いは全体的な言葉によつても考えられ得ないものである。人間はこの能力の実際的な現実の働きによつてのみ、人間として表わされ得るのである。この能力の働きの中にあつて始めて、又その能力によつてのみ、人間は探究者となり、又

探究者となつてゆくのである。かゝる探究者は、必然的に、機能的な究極性を要求し、思惟するところのものの支配権を要求するのである。

人間が思惟するものである限り、又、要求に一致する探究が、思惟するものの本性に従つて開始される限り、人間は自己の命令に従つて行為するところの行為者となるのである。我々が、探究者が人間であり、更に探究に関する探究さえも相互に伝達可能なものであること認めるとするならば、自己の、そして人間存在の、そして又思惟するものを持つ人間の同一化は、Cogito の本質的内容とは矛盾し得ない実際的な必然性なのである。

それ故に一人称に於いて述べられた「私」であるデカルトと、この敍述を指導する理性としてのデカルトは同一化されるのであり、又同時にこの理性としてのデカルトと我々との、すべての人々との同一化は成り立つのである。

アリストテレスも「思惟するものはソクラテスである」と云う時、真理と虚偽の判定を課するところの理性霊魂、或いは知性によつて思惟するのであることを意味することを云つている。

さて、「私」が存在することを知りながらも尙この「私」が何であるかと云う事を充分に明晰に知らないと云つて居る。にかゝわらずデカルトは、私はその本質が、本性が、思惟することである実体（substantia）であると主張する。再びここに問題が生ずる。

思惟するものは一体何であるか。何をそれは意味し得るのか、この方法的懐疑の終局に於いて見出された、Cogito は、正しくは如何に解すべきであるか。それに如何なる内容が要求されるべきであるか。「第六省察」に取扱われるべき問題の解明を前にして。

「考える「私」は、何ものかである。」(quelque-chose) とデカルトは慎重に主張する。然もそれは、本質的な本性を持つた実体であると云われる。

「予め思惟が何であるか、存在とは何であるか等を尋ねる事をしないとしても、彼等が考えることを認め、そしてその事が彼が存在することを導くことを認めるとき、彼等は、「我思惟す、故に我在り」の命題に確認を与えるに充分な知識を如何なるものも持たざるを得ないである。」(一一) この段階に於けるデカルトにとつては、この思惟実体の内容を全然知る必要を持たなかつたのである。ただ方法的懐疑は一つの、この懐疑の世界の、暗闇の波間に浮ぶ、最小限の知識をのみ導き得るのである。

「第一の反論は、自己に向けられた人間の精神は、自己を思惟するものであるとしか認めないと云うことから、その本性、即ち、本質はたゞ思惟するものであることに、このたゞと云う言葉は恐らくはまた、霊魂の本性に属すると云われている余のすべてを排除する意味に於いて存在すると云うことは、帰結しないと云うことである。この反論に対して、私は答える。私もまた、かしこで余のすべてを、ものの真理そのものに関する、秩序に於いて（これについて、私はもちろん、あのとき論じたのではない）排除しようと欲したのではなく、却つて単純に私の認知する秩序に於いて、排除しようと欲したのであると。かくて、その意味は、私の本質に属すると私が知るものとしては、私は思惟するもの、自己の中に思惟する能力を有するものであると云ふ以外、何物も、私はまつたく認識しないのであると云うことである。しかし以下に於いて、私は如何にしてその他のいかなるものも、私の本性に属さないと私が認識することから、また実際に、そのほかは何物も、私の本性に属さないと云ふことが帰結するかを明白にするであろう。(一二)」

尙、アーノルドの提出する「反論」に対するデカルトの「答辯」は又明瞭に、デカルトの意図を、Cogito の意味せんとする意図を表はしている。アーノルドが、「私が思惟するものであると云うこと以外は、私の本質に属する如何なるものを知らないと云ふ事実から、如何にして実際に、其の他の如何なるものも私の本質に属さないと云う事が出て来るのか」と反問するに対してデカルトは之に答える。即ち、「何故ならば、それに就いて私が未だ知らないところが沢山あるけれども、(私の中に)私が認知するところのものは、私の唯一の所有として思惟するものが、私の存在と一緒になつて居る事を認めるのに充分であるかして、神は、それに就いて私が知らないところのこれらの他の属性も私の中に植えつけずに、私を創つたと云う事は確かである。それ故、これらの附け加わるべき属性は精神の属性には属さないと云う事が知られる。何とならば、私の意見では、事物が存在し得ると云うことなしには、如何なるものもその本質の中に包括され得ないが故である。そして精神は人間の本質に属するけれども、人間の肉体に結合されてあると云ふことは、本来的な意味に於いて、精神の本質の役目ではないのである。(三)」と。

さて、この思惟するところのもの、その本質が思惟であるところのこの実体によつて、デカルトが如何なるものを表わそうとも、そこに、ある意味に於ける、厳密な制限が存在するのである。それは、特異な意味に於ける、存在性であり、肉体、それが実在的な関係を意味する限りの肉体とは区別されたる実体なのである。

では一体、実体とは如何なるものなのであろうか。デカルトの実体とは、何を意味するのであろうか。「第六省察」以前に名付けられる、この思惟するところの実体の意味は、方法の秩序に従つて如何に解されねばならないであろうか。

「実体とは、――実体の概念とは正しく次の如きものである。他の如何なる実体の助けを借りることなしに、それ

自身に存在し得るところのものである。

二つの実体を、二つのそれぞれ異なつた概念によつて認知するところのものは、これらの実体が、実際に区別されて居ると云ふことを誰も疑うものはない。

従つて、普通以上により深く確実性を探究するのでなかつたならば、私は「第二省察」――其処では存続するものとして理解され、肉体に属するところの如何なるものも精神には属さないけども、反対に、肉体は精神に属するところの如何なるものも、肉体に記述されずに存在するところのあるものとして理解される――に於いて示めされたもので満足したであろう。そして、精神と肉体との実在的な区別があることを証明するために、これ以外の如何なるものも附け加えなかつたであろう。

と云うのは、一般にすべての事物は、それらが、我々の意識の中に於いて関係すると同様の方法で、実在的な関係に於いて、相互に成立していると、我々は判断しているからである。

然し、第一省察に於いて加えられた如き、仮定的懐疑の一つが、この事実の確実であることを妨げるから――これらの事物を我々が、それらがあると同様に受けとると云ふ事実――私が私の存在の作者に就いて知識を持たないことを前提するかぎり、私が神や、真に就いて、第三、第四、第五省察で述べたところのすべては、この精神と物体の実在的な区別に関する結論に関連するのである。そしてこの区別は第六省察に於いて、最後に完成するのである。(四)」

尚今一つのこの実体に関してのデカルトの意味を、より厳密な意味を取り出して見よう。

デカルトは彼の「哲学原理」のフランス語訳者ピコに与えた書簡の一つの中に書いている。

「……かくて、すべての事物を疑うところのものは、尙疑つて居る間は、彼は存在することは疑い得ない。それ自身に就いては疑い得ないが、尙其の外の事は疑問であると云うことは、私が肉体と呼ぶところのものではなく、精神と、――思惟と呼ぶところのものである。私は第一原理として、この思惟の存在、実在（l'etre, ou l'existence）を獲たものである」(五)

学に於ける真理、確実性の探究を遂行しつゝ、デカルトは、このすべてのものを疑い得ると云ふ探究の中に、そして又それによつて、嘗つて自己が所有せるあらゆる主張、意見を無に帰す事によつて、その終局に於いて、実在的な関係をもつた、実在的関係に於いてさえも不可疑的な命題を獲たのである。

「あるもの」（quelque-chose）が存在する。この存在するものは、不可疑的な存在であり、それは、「思惟する」ところのものである。これ以外のものではあり得ない。それが存在するときは、勿論其の他の多くのものが存在しはするであらうが、然しその決定は、後の問題であり、後の「省察」に於いて考察されるべきことである。現在の段階に於ける確実なるものは、其の他の多くの実在的な関係が、その後に於いて確立されたとするならば、この附加的な意味は、（厳密な意味の修正がなくとも）、「思惟するもの」と云う表現によつて表わされる内容に、当然附与されねばならないであらう。

然し、探究するデカルトは、この「思惟するもの」に、我々は、最少の存在性を持つべき事を主張する。

思惟するところのものは、真理や虚偽に対する確不確実性の判断を課すところのものであり、従つて之れによつてのみ探究が探究として成立するところの、我々が認めなければならない最小極なのである。その存在と本質は共に決

定される。思惟すること、即ち懐疑すること自身の過程は、本質と存在の区別を勿論含むのであるからして、本性を持つところのあるものが存在し、そしてその存在の中にその本性によつて決定された事物が存在するのである。そしてそれは、内的構成原理を持つた実体として表わされるであろう。

この「思惟するもの」の存在を条件づけて居るものは勿論、其の外に沢山あるに違いない。然し今の段階では、このものの存在が、其の他のすべての存在と分離して存在しているか否は決定されない。と云うのは、我々は未だ、他の存在を知つては居ないのであるから。我々はその機能の面に就いて、探究能力を分離した。そしてこの機能に又、探究能力としての最小限の実在的存在性を附与する事を敢てした。然しながら、この能力の機能の面に於いての分離は、この能力の、あらゆる他の存在からの正確に適応する実在的分離を含んで居るかは、前述の如く制限が存在する限り未だ問題として残されて居るのである。

探究の事実から出発して、この認識能力は、その存在に関しても、その本性に関しても、又その目的性に関しても確立されたのである。これは全く厳密な意味に於ける「精神」である。

精神、思惟するところもの、知的本性は、自らの疑うべからざる存在を決定した。そこには、精神の、精神への、そして精神による解明が存在した。真理は発見され、我々の裡に獲得された。然かもその真理は存在との関連を持つた真理である。確実性の探究の道程に於いて我は先づ第一にかゝる存在との関連を持つた真理を発見する。確実性の基準は当然この真理にか或いはその他のものの裡に我々は見出さねばならない。然し現在の段階に於いては、獲得したるこの実在的関連をもつた精神、思惟するもの以外は、如何なるものも、疑わしさから免かれるものではない。た

だ確実なのは――我々にとつて――思惟するものであり、精神である。それが存在し、それが思惟するものである限り、それは、真理と虚偽の確固たる判定者となるのである。

思惟するところのもの、探究する能力は、機能として分離されたものである。従つて、現在の段階に於いては、この思惟するものの、他の存在からの厳密な実在的な分離は存在するか否かは、一つの推測の範囲を超えないものであり如何にしても疑わしいものなのである。然し我々は、一つの真理を獲得したのである。探究がそれなくしては探究となり得ない一つの能力を獲得したのである。あらゆる懐疑の終局に於いて、露わになつたものは、この精神、理性、即ち思惟するところのものであつた。然かもそれは実在的関連をもつた、真理であつた。Cogito はその本性と同時にその存在を獲たのである。

思惟するものは一体何を意味するのか、思惟するものは、神の存在の証明を前にして、即ち「第三省察」に於いて論じらるべき問題の解明を前にして何を意味ら得るのか。それは、本性とその存在が同時に決定される優れた意味に於ける精神、理性的霊魂を露わにしてくれたのである。

デカルトは云う。

「私の知る限り、私の前には誰れも、精神が（即ち霊魂）思惟の中にのみ、或いは思惟の能力の中に、或いはその内的原理の中に成立することを主張したものはない。(六)」と。

我々はこの引用に於いて、我々の研究の解答の一つを見ることが出来るのである。

我々はデカルト自身、理性的霊魂と用いた事を忘れる事は出来ない。

探究の事実を承認する限り、探究者の、そしてそのものの探究能力は存在する。これは自然の事である。デカルト

にとつての問題はこの能力――理性――が存在するが否かではなく、むしろこの能力が如何なるものであるかであつた。方法的懐疑は、確実性の基礎が理性自身の裡に存在するを明らかにした。他の如何なるものが存在しようと否と、この能力、この理性が存在しないならば、又如何なる探究も存在しないのである。これは又、我々の探究の過程に於ける、真偽の判定に対する、最高の権威を持つものであり、かゝる見地からするとき、このものは正しく「理性」と名付くべきであらう。この理性、精神、思惟するものは又精神による、精神の開示である。そこには、本質と存在が同時に決定される、――デカルト自身が云う如く――理性的霊魂が出現して来るのである。

我々は、デカルトに従つて、Cogito の意味しないもの、Cogito に何が拒否されるべきであるかを、物語りを指導するデカルトと、物語りの中に「私」として表われるデカルトとの関係に於いて、否定的な探究によつて、即ち、思想の秩序と、叙述の秩序との二つの異なつた面に於いて考察した。そこに於いて、神の存在、即ち邪まなる神の非存在を前にして解され得る Cogito の意味を解明した。この否定的な探究によつて又、Cogito の積極的な内容の解明をなさんとした。

デカルトは方法的懐疑の底に見出された Cogito に何を求めたのであるか。それは、探究が探究として成立するところの真理と虚偽の判定者としての理性を、そして本質と存在が同時に成立するところの――勿論同時に成立つと云う事は、この本質と存在が同一であると云うことも意味しない――理性的霊魂の、精神の確立であつたのではなかろうか。

〔註〕

(一) Meditationes : VI Reponses. AT. p. 225.
(二) Ibid : La libraire. au lecture.
(三) Ibid : IV Repones. AT. p 171.
(四) Ibid : IV. Repones. AT. p 175.
(五) Philosophical Works of Descartes. Translated by E. S. Haldade and G. R. T. Ross. 2 Vols. vols I. p 208.
(六) Notae in programma ; AT VIII. p 347.

三

探究の事実と承認するデカルトは、方法的懐疑によつて、感覚されるもの、又不分明な抽象的性質をそのまゝ受けとろうとはしない。更に、それが存在することによつて知識が存在すると云ふ能力は、透明でない不分明なもの、混乱して居るものをすべて、虚偽として、可疑の領域に押し入れてしまう。

この事は又、思惟するもの、探究能力が、その懐疑の真底に現われ出て、その本来の面に、探究の主導者として、定置されることを意味する。それは、独立した、自由なる意識であり、真理と虚偽を判断すべく課せられた能力の見地からするとき、正しく理性と、呼ばるべきであり、理性的霊魂と呼ぶべきものであらう。そしてデカルトはこの理性の裡に確実性の基礎を、見出すのである。

思惟するものは、他のあらゆる意見を、思想を、無批判に、他から受けとらないであろう。

「それは、自足して、あらゆるものを自分自身の資質からひき出そうと思うであろう。思惟する個人は（理性は）、

思惟を引き受け、全責任をもつて思惟を担当するであろう。世界に対するその支配の道具――方法――を確実に手中に納めながら、自分は純粋に思惟するものであることを公言する」(一)

この理性は、その純粋性の故に、その独立性の故に、自己を絶対的なものと考える。

探究の測り知れない懐疑の到達点は、この前に先き立つものはすべて疑わしいとする限り、それはデカルトにとつて絶対的な始源(二)となつて現われる。

然もこの始源はその裡に、そのものの本性からして確実性の基準を、一般的基準を見出すことによつてより後の探究にとつての進行を確実ならしめるのである。

「……しからば、また私は或ることが確かであるためには何が要求されるかをも知つて居るのではあるまいか。疑いもなく、この第一の認識の裡には、私が肯定するところのものあるものの一定の明晰で判明な知覚のほか他の何物も存しない。かゝる知覚は勿論、もし私がかように明晰判明に知覚する何等かのものが偽であることが嘗つて生じ得るならば、私にものの真理を確実ならしめるに十分ではないであろう。従つてすでに私は、私が極めて明晰に極めて判明に知覚するものはすべて真である、と云うことを一般的規則 (Regula generalis) として立てることが出来ると思う。(三)」

勿論、この始源に到る道は、みのり豊かなものではあつたが、険しい苦しい道であつた。「ある問題が明晰に意識される前には、不幸な意識と困惑と苦悩との時期があるのである。……(中略)……明晰判明な観念にかんするかれの不明瞭な理論に明瞭判明な様子を与えるために不幸な人間としてもがいているのである。(四)」

闇の中を確実性の光を求めさまようデカルトのこの始源に到る迄の「方法的懐疑はデカルトの生活上の懐疑の複写」

である。スコラ派的な習慣や慣例が、そして、またこの哲学者のこの上ない慎しみが、三百年来、読者にこの懐疑の苦しい性質をいつわりかくしている。デカルトが疑つたと云うことは、全く自然のように思われる。かれは、この世に疑うために、つくられ、生れてきたようである。何と云う明白なあやまりであろうか。とんにちわれわれが、かれの歩んだ苦しい道に再発見しなければならないものは、歩みつゞけ支えとなるものや、既得の確実性を失い、その暗夜についあのように詩的に語つた中世の神秘家たちのいづれに劣らず劇的に――デカルトは世に生きることをやめなかつたからいつそう劇的に――模索する青年、若者である」(五)

然しながら、懐疑によつて、否定としての懐疑の裡に、探究能力としての理性が生れる。この理性は思惟するものとしての精神を意味しその確実性への探究に於ける真偽の判定者として、最高の権威者であり、それは理性的霊魂と呼ばれる。

更に、その上理性自身によつてその裡に、真理の一般的基準は求められた。然も方法を用いることによつて、探究者は、長い暗夜の探究から、照るい理性の光の下を歩み出す。確実性への探究の第一真理は、思惟するものそのものの裡に求められた。

「認識はやつと本来の面に定置され」(六)たのである。

Cogito の意味は明らかにされた。

思惟するものは一体、神の存在証明を、第六省察を前にして何を露わにしたかを知る事が出来た。

デカルトにとつて問題であつたのは、理性が存在するか否かではなかつた。思惟するもの――この「私」の存在が

問題ではなかつた。

理性、思惟するもの、これが探究の事実を承認するデカルトにとつて如何なるものであるのかが問題であつた。それは探究の——確実性の探究に於ける——探究者としての、これなくしては如何なる探究も不可能となる、真理と虚偽との判定も於ける最高の権威をもつた理性であり、精神であり、理性的霊魂であつた。

あらゆる確実性の探究を前にして、先づ確立されなければならなかつたこの精神の確立は一体、我々に何を意味するのか。

何故に、デカルトは権利上の第一真理を論理学的「原理」に、証明すること出来ない公理の裡に、それ認めなかつたか。何故に精神の確立をもつてその第一原理となしたるのか。

ルフェーブルは云う。

「Cogito はいくつかの局面をもつて居る。もしそれが論理的要求を外にあらわして居るならば、それはまた、生れかけの個人主義と、近代人の（個人的の）それ自身による意識とを内に含んで居る。……中略……

要するに Cogito は形成中の諸科学と、すでにモンテーニュに於いてあきらかに意識されて居つた主観的、懐疑的相対主義との間の十六世紀には未だ決着を見ないまゝになつて居つた争いに対する解決としてあらわれて居る。」(七)

ところで、モンテーニュの最後の結論は何であつたか。勿論智慧であつた。然し学校で教わるが如き知識とは凡そ異なるものであつた。モンテーニュは当時のあらゆる学の、あらゆる思想の混乱の原因を独断主義（dogmatism）に由因すると考える。そして智慧を以つて、「その結果に於いて判断しない習慣も獲得するところの精神の労力多き修練」(八)と見る。彼にとつては、良識の人間とは、決して自己自身の意見を確信しないことであり従つて、懐疑すると云

うことは智慧の最高の徴(しるし)であつた。

勿論デカルトもその学校を去つた時、そこに自己自身一人のモンテーニュであつた事を見出した。

「私は幾多の懐疑と誤謬に取り囲まれて居つたので、私自身の無智が益々多くなつて来ることを発見する事以外、私の学んだ事からは獲られなかつた」(九)と告白するデカルトは、正しくモンテーニュの正しさを認めるに充分であつた。然し、単なるモンテーニュではなかつた。

「懐疑以上のよりよい或るものを期待する懐疑家であつた。モンテーニュの徹底的な否定的な智慧は、何ら完全なる智慧とはなることは出来ない。それは勿論、完全なる智慧の第一段階ではあつた。然し真の智慧とは積極的なものでなければならない。それは、我々が知らないと云うものによつて作られるものでなく、むしろ我々が知つて居るところの充実の上に基づかねばならない。それ故に問題は、モンテーニュのかくの如き普遍的懐疑の苦しい試練にたえ得るが如き知識を発見することであつた。何故ならば、それは少くとも、不動の確実性となるであろうから」(一〇)

デカルトのすべての努力は、モンテーニュの懐疑から逃れんとする、不安におののくあがきであつた。「方法叙説」のそれは正に我々にこの事を示して呉れる。十六世紀の当時のフランス語で淡々として書かれたこの著作の裡に、デカルトはこの不安の道を、然しみのり豊かな道を示して呉れる。実際、デカルトの「方法叙説」は、デカルトによつて書かれた、モンテーニュの懐疑に与える解答であつた。

そして我々はその裡に、「Cogito, ergo sum」の命題の意義を知る事が出来るのである。

「良識(bon sense)は、あらゆるものの中でこの世に尤も公平に附与されて居るものである。……良識、或いは理性は本性的にあらゆる人間に平等なのである。」(一一) 方法叙説の初に、正に初に於いて公言する。

この宣言（Cogito, ergo sum）は、我々の理性の、探究する理性の独立の宣言ではなかつたか。モンテーニュへの徹底的な解答の文字ではなかつたか。

勿論デカルトの Cogito は、幾多の局面を持つて居る。又「ergo sum」に結びつくとき、又幾多の研究がそれを示す如く、論議の対象とならざるを得ない。この命題、第一真理――デカルトにとつて――を廻つて展開されるデカルト哲学の体系全体に就いての幾多の矛盾と問題が提出され、幾多の研究者の解釋が行われて居る。それは又それぞれの立場で我々にとつて価値あるものであり、デカルトの内含する幾多の面を露わにして呉れる。

然し我々は、先づ確実性の探究に於ける苦悩の道に於いて、探究する能力を発見し、それに理性と云う名を与へ、精神を、理性的霊魂の名を与えたデカルトの近代性を忘れる事は出来ない。よしその Cogito の内に何らかの矛盾が指摘され、「ergo sum」との連関に於いて、不明晰な観念が内在しようとも。

我々は最後に今一度引用しよう。

「私の知る限り、私の前には、誰も、精神が、思惟の裡に、或いは思惟能力の裡に、或いは、認識の内的原理の裡に、成立することを主張したものはない。」

以上

〔註〕

(一) ルフェーブル著、服部青木訳「デカルト」九三頁 Henri Lefevre : Descertes. paris 1947.

(二) ルフェブルは、この始源と云う言葉を用いる。

(三) Meditationes ; III meditation AT. p 27.

(四) ルフェーブル前掲書、一四四頁。ルフェーブルのこの箇所の引用は、彼の意に沿つたものではないが、私にはデカルトの懐疑の様相を適切に表現して居るものとして引用した。

(五) 同前掲書、九六頁。

(六) 〃　一三四頁。(傍点著者)

(七) 〃　二三四頁—二三五頁。

(八) Etienne Gilson ; The unity of philosophical Experience, New York. 1950. chap. v. Cartesian Mathematicism p 127.

(九) Discours.

(一〇) E. Gilson : Cartesian Mathematicism. p 128～129.

(一一) Discours.

(一二) アンリー・ルフェブルは最近の著作に於いて厳密ではないが——著者自身云う如く、——甚だ広汎な、「デカルト論」をものにし、デカルトの諸矛盾を解明せんとして居る。「Cogito, ergo sum」に就いても我々にとつて興味ある見解を述べて居る。これらの諸考察は、従来の文献学的研究や、論理的研究、宗教的立場を重んずる諸研究、或いは実存論的諸研究とは相反するものではなく、それらを基礎としてその矛盾をその「思想の歴史」の裡に於いて見んとするものである。勿論この試みはデカルトの体系の含む矛盾を矛盾として深くすることによつて、その含む矛盾の方向が明瞭となつて行くのであろう。

Henri Lefevre : Descartes, 参照

尚、私にとつて、かゝるデカルトによつて確立され、カント、ヘーゲルによつてより深化された精神の確立の近代性が何を意味するかが興味あることであり、今後私にとつての課題となるのであらう。